

平成17年度 大学院工芸科学研究科 学位記授与式
(11月博士学位授与式)
学長告辞

本日、博士の学位を取得されましたこと、まことにおめでとうございます。京都工芸繊維大学を代表して心から祝意を表します。また、長い間にわたってお二人の研究を支えてこられたご家族、指導教官および関係者の方々に対して深い敬意を表します。

京都工芸繊維大学は、昭和63年に大学院の組織を改組し、工芸科学研究科を設置いたしました。そして、今までに、541名の博士号取得者を輩出し、多くの知的財産を着実に蓄積してまいりました。本日は、論文博士第139号及び140号の学位を授与させていただきましたが、皆さんの研究業績は本学の知的財産とさせていただきますこととなります。提出していただきました学位論文は、広く人々に公開されることになり、それぞれの学問分野の新たな展開のために、また、技術革新や産業創生の新たな素材として、さらに皆さんの後輩の学徒の研究のために利用されることとなります。

学術博士を取得された中野仁人さんの論文題目は、「グラフィックデザインにおける諧調表現について」です。グラフィックデザインにおいて使用される諧調表現（グラデーション）について、歴史、技術、表現効果という三つの視点から分析されています。江戸時代の浮世絵におけるぼかし技法がどのように変遷し、表現効果がどのように推移したか、ヨーロッパのシュレー、ロートレック、リヴィエール、アールデコやロシアアヴァンギャルドにどのように影響を与えたかを明らかにされています。また、諧調表現がどのような社会の要請のもとで使用されてきたかを社会科学的視点から分析しておられます。さらに、諧調表現の効果の将来の可能性について論じておられます。中野仁人さんの広い視野に基づく研究成果は、美術史、デザイン史、および印刷技法史の分野で高く評価されるものであります。

工学博士を取得されたゴッフレッドデポルトさんの論文題目は、「Advances in Laminated Ceramic Oxide Composites: From Preparation to Piezo-spectroscopic, Mechanical and Tribological Characterization」です。良質のセラミックスを製作するためには、機械的性質と耐摩耗性を向上させることが不可欠で、このためには熱膨張係数が低い層を表面側に配列する積層構造をとることによって表面に圧縮残留応力を発生させることが重要です。ゴッフレッドデポルトさんは、アルミナとアルミナ-ジルコニアセラミックスを使って様々な積層セラミックスを作製し、それらの機械的性質と耐摩耗性の性質が、熱膨張係数やレイヤーの厚み比率によってどのように影響されるかを実験的に明らかにし、理論的考察を行なっておられます。このようなゴッフレッドデポルトさんの研究成果は、優れた機械的性質と耐摩耗性をもったセラミックスを作製する上での具体的な方法を提示するものであり、工学的に高く評価できるものです。

このように、お二人の博士論文は、それぞれ、学問的にも、また、社会や産業界への貢献という点においても価値が高いもので、その成果に対して本日は、博士の学位を授与させていただきましたが、今日からは、更に高い目標を立て、誇りをもち

って、それぞれの能力をそれぞれの分野で生かしていただきたいと思います。お二人の新しい旅立ちにあたって、これからの研究生活や社会生活にとって大きな推進力となる「忍耐」、「情熱」、「挑戦」ということについて一言お話ししたいと思います。

お二人は、主に研究者としての道を進まれることと思いますが、研究者の世界は競争と協調の世界です。研究者同士は、それぞれの分野の研究・開発において互いに競い合っています。その一方で、研究者はお互いの研究を相互批判し、その成果を共有することによって、長い間にわたって人類の知的財産を蓄積して参りました。また、研究者同士がお互いのよい所を認め合い、互いの励みにすることはそれぞれの真理の探究へのエネルギーとなっています。

このような世界が形作られた背景には、研究を進めていく事に多くの困難があり、研究者はそれを克服するために常に努力することが必要であるという理由があります。毎年10月になるとノーベル賞の受賞者が発表されます。それに伴い、受賞の対象となった研究成果が得られるまでのエピソードが新聞などで取り上げられ、人々の知るところとなります。それらのエピソードの多くは、研究を続けていくに際して直面する様々な課題を明らかにしています。

今年の医学生理学賞は、ピロリ菌が胃炎や胃潰瘍の発生に深くかかわることを明らかにした研究でした。西オーストラリア大学のバリー・マーシャル教授と病理学者のロビン・ウォーレン博士に贈られました。この研究も様々なエピソードに彩られています。そのうちの三つが新聞紙上で取り上げられました。

一つは、ピロリ菌の培養成功が「偶然」あるいは「幸運」の産物であったというものです。通常の細菌培養方法ではうまく行かず、苦労を重ねていたときに、たまたま復活祭の5日間の休暇で放置していたことが幸いして培養に成功したということです。これは「偶然」や「幸運」と形容されていますが、その「幸運」をもたらしたのは、たゆまず実験を重ねていた忍耐によることを忘れてはいけません。研究者の世界では、「幸運の女神は、忍耐した者だけに微笑む」といわれています。自分の立てた仮説がすんなりと検証されるということは、滅多にありません。自分を信じ、実験に実験を重ね、冷静に検証していくという単調な仕事に如何に耐えるかということが、成果を産む一つの要素となります。

二つは、ピロリ菌が胃潰瘍を起こすことを証明するために、自ら実験台になったというエピソードです。これは、研究者が自らの仮説を実証したいという情熱が如何に強いかにいうことを現わしています。この「真実を明らかにしたい」という情熱は、時には常軌を逸したものになりますが、一方で多くの困難を克服することを可能とし、長い研究生活の支えとなります。

三つは、権威との粘り強い戦いです。当時の学会の権威者あるいは主流は、胃の強い酸性の中では細菌は生きられないという考え方でした。従って、強い酸性をもつ胃のなかでピロリ菌が発生するという考えは、論文発表当時の1980年代には無視されたそうです。アメリカ国立保健研究所(NIH)が公式に認め、彼らの業績が認知されたのは、論文の発表から11年後の1994年のことでした。

研究においては、「当然と考えられている、より基本的な原則を疑ってみる」ことが大切であることは、多くの方が言っています。しかし、このことを実際の研究場面で実践することには大変な努力を要します。なぜなら、従来とは異なる原則に基づく研究成果は、それまでの前提を覆すこととなりますので、当然のことながら権威への挑戦となります。従って、それが認められるためには、他の多くの研究者に

よって支持するデータが蓄積されていかなければなりません。研究は、一人よがりでは成り立ちません。権威を安易に信じずに研究を続けるとともに、粘り強く検証していく努力が必要なのです。ここにも、研究者同士の競争と協調の意味があります。ノーベル賞は特定の受賞者に贈られますが、そのまわりには、その研究を支えた多くの研究者がおり、それらの人々は受賞によって喜びを分かち合うのです。

研究者としての道は、このように、弛まぬ地道な努力を要する厳しい道です。お二人には、たくましい忍耐と熱き情熱をもって、様々な困難な課題に果敢に挑戦していただきたいと思います。

困難を克服し、自らが考えた仮説が実証された時の喜びは、何物にも替えがたい喜びであります。また、その成果が認められ、さらに、人々の幸福に結びつけることができれば、大きな報いとなります。

お二人の活動が世界の人々の幸福に大きく貢献することを祈って、私の告辞いたします。

学位の取得、まことにめでとうございます。

平成17年11月28日
京都工芸繊維大学長
江島義道